

関西広域連合 はなやか関西・文化戦略会議について

- 関西文化の内外への発信を強化し、関西文化を一体となって振興するために、様々な分野の専門家等から幅広い知見を求め戦略を検討するとともに、さらなる行政等間の連携交流を図るため平成26年7月に設置

➤ 委員等

(委員 11名)

| | |
|----------|----------------------------------|
| 大南 信也 | 特定非営利活動法人グリーンバレー理事長 |
| 河内 厚郎 | 文化プロデューサー、神戸夙川学院大学観光文化学部観光文化学科教授 |
| 斎木 宣隆 | 独立行政法人国際交流基金京都支部 支部長 |
| 坂上 英彦 | 京都嵯峨芸術大学芸術学部デザイン学科教授 |
| 佐々木 雅幸 | 文化庁文化芸術創造都市振興室長、同志社大学特別客員教授 |
| 佐藤 千晴 | フリージャーナリスト、大阪アーツカウンシル統括責任者 |
| シャルリ・ブロー | 在京都フランス総領事館 総領事 |
| 寺田 千代乃 | 公益社団法人関西経済連合会副会長 |
| 野田 邦弘 | 国立大学法人鳥取大学地域学部地域文化学科教授 |
| 蓑 豊 | 兵庫県立美術館館長、ミュージアムぐるっとパス関西実行委員会委員長 |
| 山上 直子 | 産経新聞論説委員、産経新聞大阪本社文化部編集委員 |

(幹事)：関西広域連合構成府県市、公益社団法人関西経済連合会、公益財団法人関西・大阪21世紀協会、関西元気文化圏推進協議会、歴史街道推進協議会

(オブザーバー)：福井県、三重県、奈良県、近畿農政局、近畿経済産業局、近畿地方整備局、近畿運輸局

➤ スケジュール

- ・ 第1回会議 (7月29日)
- ・ 第2回会議 (8月27日)
- ・ 幹事会 要望・提案文案作成、来年度事業検討
- ・ 広域連合委員会 (10月29日) 国・オリパラ組織委員会等への要望・提案内容協議等
- ・ 若手ワーキング会議、幹事会
- ・ 第3回会議 (2月～3月) 検討成果(まとめ)作成
- ・ 広域連合委員会 (3月26日) 検討成果報告 必要に応じて第2次要望活動の協議

現在議論のキーワード(第1回・第2回結果より)

方向性・キーワードについて

- ・ 「関西」の知名度は低い。「関西」をどんなイメージで発信したいのか。何を訴えるのか
- ・ 海外の人に関西の何がどう響くのか。海外の目でのマーケティングが必要
- ・ 「はなやか関西」という言葉・マーク・英文キャッチコピーを使って、「関西」を訴えていく

- ・コンセプト → ストーリー → 取り組むイベント
- ・「はなやか関西」だと海外への発信が中心になるので、そこから少し離れ、関西の市民レベルでオリンピックを祝う、被災地も含めて手をつなぎ日本再生につなげる等の歴史的転換にふさわしいコンセプトも含め3つ程度並べてみる。
- ・関西の強みは歴史と文化、伝統。それ以外にもう一点、あっと驚くことで「関西」を打ち出す
- ・伝統を踏まえた上で、伝統文化と現代アートの融合から、新しいアートをクリエイトしていく
- ・日本人は自然との共生や平和な心を大切にしている、そのルーツは関西
- ・関西の多様性がキーポイント。関西は多文化共生の最先端の地
- ・関西は、普通の人々が生活している＝関西はリアル・ジャパン
- ・東京では出来ないものを関西でやるべき。関西流といわれるようなオリジナルのものを
- ・「関西ルネサンス」「土着する文化・住み着く芸術」
- ・「華」「驚き」「癒し」

レガシー

- ・関西はお金をできるだけかけずにソフト面のレガシーを主張。関西の最大のポテンシャル「おもてなし」で協力
- ・成熟社会であり、ソフト面に重視して展開を図り、それをレガシーとして次の世代に残していく
- ・後に2020年を振り返った時に、その時に新しく生まれたものが大切な資産になっている
- ・ビフォーオリンピックとアフターオリンピックとで、地域ががらりと変わる
- ・はしゃいでいると言われないように
- ・既存のものとの組み合わせ
- ・昔を振り返り、そこに何かを加えて新しいものを作る
- ・文化プログラムは地域の持続発展を意識
- ・関西全体のコンセプトを受けた各府県市ごとのコンセプトは違っても、全体としてレガシーに
- ・関西各地でアートプログラムを実施し、地域と海外の個人的なつながりを後に残す

具体案について

(考え方)

- ・とにかくやろう、できるところからやろうというくらいのスタンスで
- ・共通のイベント、各地のイベント（各地が競争し、いろいろな会場に足を運んでもらう）
- ・いくつか大きなジャンルに分ける
- ・面白いプロジェクトを作るのも、競争し合う。草の根の文化力を高める
- ・文化を創り出した地域の人たちとの触れ合いの機会を提供することが重要。交流型文化イベントの仕掛けが必要
- ・現代アートの価値を再認識してもらい、高めていく。
- ・フランス語圏の人々の要望に答えられるようにアプローチ。コミュニケーションで重要なのは言語

- ・既に取り組んでいる周年事業を関西全体で統一的に見せる（高野山開創1200年、日本文化1400年など）
- ・スピリチュアルなものが21世紀はとても大事
- ・高校生の国際交流

（事業アイデア）

- ・象徴的なスペクタクル、舞台芸術を国際的なコラボレーションなどにより中心の華としてはどうか
- ・村上春樹氏展覧会、三枝成彰氏オペラ、ファッションショー、ビエンナーレ…
- ・7月には関西の伝統演劇は毎日公演
- ・関西にある上方芸能の文楽や歌舞伎、宝塚歌劇団での新作品上演
- ・宗教に寛容な「いやしの空間 関西」
- ・日本とは何か、日本人とは何かを説明できる場所をつくる
- ・障害者アート（「美の滋賀」等）
- ・国中の鐘を鳴らす、アーティストが夜中のうちに街中にオブジェを置いて朝、住人を驚かす、東海道五十三次をみんなで手をつなぐ等、日本中がつながっている・喜んでいる、ということの世界に発信する取組

情報発信について

- ・ソーシャルメディアの展開（上手に「つぶやく」）
- ・「JETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）」を広報活動に活用
- ・既存の関連組織等の活用
- ・オリンピックPRには関西をはじめ日本全体のPRをもちこむように
- ・「リアル・ジャパン＝関西」を発信
- ・イメージと近い副題を外国語で
- ・多言語化。日本文化の真髄が理解できるよう補足説明が必要。現場でも英語で通用するようにする。
- ・映像の配信

人材育成

- ・プロデューサー、アートマネージャー人材の不足。2020年をきっかけにそういう人材も東京一極集中が進むのではないかという危機感
- ・アートプロジェクト・アートマネージの担い手の人材養成が重要
- ・プロジェクトの仕事を通して育てる

その他

- ・2020年に中核世代となっている20代から40代の若い世代を交えて、作戦を練る
- ・資金調達
- ・障害を持った人に優しく
- ・民間で立ち上げたアーツサポート関西との兼ね合い
- ・アーツカウンスル関西